

第45回新潟化学療法研究会

日時 平成18年6月17日(土)
午後3時～6時40分
場所 ホテルイタリア軒
3F サンマルコ

I. 一般演題

1 加齢と性差による薬剤アレルギーの変化

宇野 勝次・小林 貴志*
水原郷病院薬剤科
新潟薬科大学医薬品情報学*

水原郷病院の過去3年7ヶ月間(2002.4～2005.10)でLMTにより起因薬剤を検出した薬剤過敏症患者156例を対象に、薬剤アレルギーの頻度、発現率、過敏症状および起因薬剤について加齢と性差の視点で検討した。

その結果得られた知見は、1. 薬剤アレルギーの頻度は加齢により増加(60～70代にピーク)し、女性の方が多いが、その要因は来院患者の頻度に起因する。2. 薬剤アレルギーの発現率は加齢により有意に低下するが、性差による変化は認められない。3. 薬剤アレルギーの症状は加齢による変化を認めないが、男性は皮疹に比べ肝障害が多く、女性は肝障害に比べて皮疹が多い。4. アレルギーの起因薬剤は、加齢により抗菌薬から循環器官用薬の割合が多くなるが、性差による変化は認められない。5. 加齢によるアレルギー発現率の低下はリンパ球の反応性の低下と使用薬剤に起因し、性差によるアレルギー症状の変化はホルモン(エストロゲン)に起因すると考えられる。

2 小児滲出性中耳炎及び副鼻腔炎に対するマクロライド療法の有効性について

江夏 照晋
(有) 参友堂 なごみ調剤薬局
小児滲出性中耳炎及び副鼻腔炎に対する14員

環マクロライドの少量長期投与について、これまでの経過を見直し、その有効性について分析・検討を行った。対象は滲出性中耳炎、副鼻腔炎及び両合併症に対しマクロライド療法が行われた165症例とした。その結果、マクロライド療法は副鼻腔炎、滲出性中耳炎、両合併症いずれの疾患においても高い有効率を示した。有効率を性別で比較すると、滲出性中耳炎において女児の有効率97.2%が男児の62%を優位に上回った。また、マクロライド療法の改善期間は副鼻腔炎で25日間、滲出性中耳炎では45日間必要であることがわかった。抗生剤別の有効率をみると、滲出性中耳炎や合併症ではCAMがEMより有意に有効率が高かった。CAMは有効性が高いが、苦味で服用困難の症例が少なからず認められるため、製剤上の工夫が必要と考えられる。

3 県立新発田病院における鼻咽頭検体由来の肺炎球菌・インフルエンザ菌に関する検討

大石 智洋・松井 亨・坂井 貴鼠
塚野 真也・田口 哲夫・高橋 直子*
小野 智美*・生方 公子**
県立新発田病院小児科
同 細菌検査室*
北里生命科学研究所感染情報学
研究室**

【目的】近年耐性化が問題とされている肺炎球菌、インフルエンザ菌について、薬剤耐性遺伝子の保有状況と抗菌薬前投与の影響につき調査する。

【方法】2006年に新潟県立新発田病院小児科受診呼吸器感染症罹患児より分離された肺炎球菌、インフルエンザ菌のPBP遺伝子解析および分離例の抗菌薬前投与の調査を行った。

【結果・考察】肺炎球菌はgPISPおよびgPRSPが90%以上を占め、全国データに比しPBP2X変異株の割合が多い傾向にあった。インフルエンザ菌は約半数がgBLNARで、全国データに比しgLow-BLNARが少なくgBLNASが多い傾向にあった。抗菌薬前投与の約6割を占めていたセフ